

第 6 章

独立行政法人日本スポーツ振興センターへの移管と 関係機関・団体との連携【平成21年度～平成28年度】

平成21年4月1日、登山研修所は文部科学省から独立行政法人日本スポーツ振興センターへ移管され、名称は「国立登山研修所」となった。

研修会については、平成20年度まで実施した「大学生登山リーダー研修会（夏山1）」を改編し、平成21年度から「大学生登山リーダー研修会（春山）」として開催した。大日岳雪庇崩落事故後の平成12年度から中止していた大学生の冬山研修会は、平成21年度に「大学生登山リー



平成21年度大学生登山リーダー雪上研修会（大品山）

ダー雪上研修会」として、大品山周辺を実技会場に再開し、平成23年度には、「大学生登山リーダー冬山研修会」として、大日岳周辺で実技研修を実施した。また、平成21年度から、中高年登山者の増加をはじめとして、多様化する登山志向、形態やニーズに対応した安全登山を实践、普及できる指導者を養成するため、登山のリーダーや指導的立場にある者を対象に、「安全登山普及指導者中央研修会」（年2回開催）を新たに開設した。

施設、設備については、平成21年にレーザーレベルセンサー（積雪深観測装置）を導入、同年12月から冬山前進基

地の積雪等自動観測を始めた。平成22年には、トレーニング室の耐震改修工事を行った。

また、登山研修所の研修事業等を円滑に運営できるように、関係機関・団体との連携をより強めた。

まず初め、平成21年度には、立山カルデラ砂防博物館と「山岳地帯の気象、冬山の積雪調査研究等に関する連携・協力の推進に関する基本協定書」を締結し、国立青少年振興機構国立立山青少年自然の家と「国立立山青少年自然の家との事業協力に関する覚書」を交わした。続く平成22年度には、国立登山研修所友の会と「国立登山研修所友の会との事業協力に関する協定書」を締結した。また、大韓民国国立公園管理公団とは、「大韓民国国立公園管理公団山岳安全教育センターとの事業協力に関する協約書」を締結し、翌年度から派遣と招聘を隔年で行う相互交流を開始した。

平成25年度には、富山県警察本部生活安全部地域課と「登山事故防止と安全登山の普及のための研修事業や情報提供を相互に行い、健全な登山の発展に寄与すること」を目的に協定書を締結した。また同年、公益社団法人日本山岳ガイド協会とは「公益社団法人日本山岳ガイド協会との事業協力に関する協定書」を締結し、公開講座の実施や安全登山ハンドブックの作成を協力して行う事業が始まった。



大韓民国国立公園管理公団との協約書締結

1 大学生登山リーダーを対象とした研修会

この研修会は、大学生登山リーダーを対象に、登山に関する基礎的知識と実技について研修を行い、リーダーとしての資質を向上させることを目的としたものである。

(1) 大学生登山リーダー春山研修会



剣岳頂上直下

【研修時期・期間・場所】

5月下旬・7日間・登山研修所及び剣岳周辺

【研修内容】

平成20年度まで実施した大学生登山リーダー研修会・夏山1を改編し、「春と冬の天候を併せ持つ春山の気象について理解を深め、リーダーとしての判断力を養うとともに、春山（残雪期）登山に必要な登下降の基本技術や登はん技術を習得すること」を目的に平成21年度からは、大学生登山リーダー研修会（春山）として開催している。

これまでと同様に7日間の日程で、剣岳周辺での3泊4日の実技研修と、その前後に3日間研修所で講義等の研修を行った。

「雪上基礎研修コース」、「雪上研修コース」、「山岳スキー研修コース」の3コースを設け、研修生が個々の能力や登山志向に合わせてコースを選択できるようにした。これには、研修生のレベルに応じた研修を実施することで、充実した研修を実施するとともに安全性を向上させる目的があった。

「雪上基礎研修コース」は、剣沢周辺や平蔵谷、長次郎谷において雪上の基礎技術を研修し、「雪上研修コース」は剣沢周辺や長治郎谷、平蔵谷だけでなく、別山尾根や源次郎尾根で研修を行った。「山岳スキー研修コース」は、二股、池の平山、剣岳、長治郎谷などを主な実技会場として山岳スキー技術

の研修を実施した。

講義は、山本正嘉による「登山の運動生理学」、飯田肇による「春山の気象と氷雪」、野田透による「登山の医学」、小林亘による「ナビゲーション技術」を実施した。平成22年度には、竹内岳洋による「大学山岳部の活動からヒマラヤの峰々へ」の特別講義も設けた。

【エピソード】

平成21年度は、研修会実施時期に「新型インフルエンザ」が流行したため、参加を辞退する学生もいた。

平成24年度には、講義講師山本正嘉の指導のもと握力・脚筋力・背筋力・長座体前屈・垂直跳・上体起こし・持久力の7項目について研修生と講師を対象に体力測定を実施した。垂直跳を除き全ての項目で講師の方が研修生より優位であった。

【参加人数・主任講師】

募集定員は平成21年度、平成22年度は40名であったが、平成23年度からは30名とした。この期間の平均参加者数は27名であった。最多は平成25年度の38名、最少は平成22年度の16名だった。主任講師は全て鈴木清彦が担当した。



長次郎谷左保上部

目 標：Dzanye II（ジャネⅡ峰）及び Lhonak peak（ローナクピーク）の初登頂
→ 結果 Dzanye II 初登頂成功【2015（平成 27）年 10 月 4 日午後 12 時 5 分】

期 間：平成 27 年 9 月 3 日～ 10 月 23 日

メンバー：学生部所属学生 6 名

隊長	真下孝典 青山学院大学山岳部
登はん隊長	宮津洸太郎 明治大学山岳部 OB 会
会計	木村健太 東京工芸大学山岳部
医療	芦刈新之助 電気通信大学 ワンダーフォーゲル部
通信	橘井駿 専修大学山岳部
輸送	野澤岳大 立正大学探検部

Dzanye II 峰（ジャネⅡ峰）及び Lhonak peak（ローナクピーク）は、ネパール北東部のチベット・ネパール・シッキム国境付近のエリアにあり、Dzanye II 峰は Dzanye I 峰の東側に位置するピークで、Dzanye I 峰と Lasher I 峰との間に位置す



ジャネⅡ峰



プラトーからピークへ

る。また、もう一方の Lhonak peak は 6,070 m ピークとして一般的にネパールで販売されるトレッキング地図などで確認できる。

この登山隊は日本山岳会創立 110 周年にあたり学生部で企画された。青山学院大学の真下孝典の一言で 2014（平成 26）年 2 月から海外登山研究会が発足し、世界中の山を検討したうえで、この登山隊が実行にうつされた。真下は母校青学山岳部による 2013（平成 25）年アウトライアー東峰海外登山を体験し、「海外登山を現役大学生のみの手で行いたい」という思いを強めた結果が、学生部ネパール東部登山隊である。今回のメンバーは学生部所属の学生ということで募集をかけた。全ての隊員が山岳部所属というわけではなく、ワンダーフォーゲル部や探検部も含んでいた。そのようなバラバラのメンバーだったが、それぞれの強い個性と海外登山に対する意欲がこの登山隊を支えていた。当初の研究会に参加していて結局登山隊に加わらなかった学生になく、今回の登山隊メンバーにあったのは、まさに海外登山に対する意欲であり、これが自主性を生み、自らの力で計画を進めていくことができたのだ。その結果、一座の初登頂に成功したのだと確信している。

（真下孝典）

研修生のその後の活躍（日本山岳会学生部女子ムスタン登山隊 2014） **Topics**

2014（平成 26）年 9 月 29 日午後 1 時、彼女たちは未踏峰・マンセイル峰（Mansail 6,242 m）の山頂にたどり着いた。マンセイル峰が位置する、ムスタン山群は中国チベットとネパールの国境線上にあり、政治的な理由で今日まで未踏のエリアとして残されてきた。

登頂メンバーは隊長の井上由樹子（武蔵野大学・当時 4 年）、長谷川恵理（創価大学 4 年）、中村真理子（筑波大学 4 年）、アドバイザーとして谷口けいの 4 名。三島夏帆（弘前大学 3 年）は体調を崩し登頂は断念した。女子学生 4 名は国立登山研修所で知り合い、井上が隊長として仲間を募り実現に至った計画であった。計画は日本山岳会 110 周年事業に選ばれ、日本山岳会の女子学生だけの登山隊が結成された。過去の学生部遠征は学生のみであったが、技術や経験の未熟さから国立登山研修所で当時、講師として指導をしていた谷口けい氏にアドバイザーを依頼することとなった。谷口氏は 2009（平成 21）年、女性として初めて「ピオレドール賞」を受賞している、名実ともに日本



マンセイル南峰（左）とマンセイル峰（右）

最強の女性クライマー。そんな彼女と共に経験したヒマラヤ遠征は女子学生たちにとって未知の世界であった。

アタック当日、キャンプ出発時は青空が広がっていたもののしばらくして小雪が降り始め、稜線上では本降りに。1 本のロープに 4 名でアンザイレシ、雪、氷、岩のギア類をフル活用した末の登頂であった。3 時間の間に 20 cm ほどの積雪に見舞われ、山頂での視界は無し。喜びも束の間、懸垂下降で下山を開始した。登頂の翌日には BC へ到着した。

下山後、隊長の井上はこのような言葉を残している。「こんな素晴らしい遠征が経験できて多くの皆様に感謝の気持ちでいっぱい。谷口さんにはいつも怒られてばかりだったが、大変有意義で楽しい 39 日間だった」と。

（登山隊の詳細な報告は公益社団法人日本山岳会「山」2014 年 11 月号に掲載されている）

（長谷川恵理）



氷河の上を行く

(2) 大学生登山リーダー夏山研修会

【研修時期・期間・場所】

8月下旬・7日間・登山研修所及び劔岳周辺

【研修内容】

平成20年度まで実施していた大学生登山リーダー研修会・夏山2を改編し、「登はん基礎研修コース」、「登はん研修コース」、「縦走研修コース」の3コースを設定し、「夏山（無雪期）登山に必要な岩場や急斜面などでロープを用いた安全確保技術や判断力等を習得するとともに、各季の登山の基礎となる技術を確認し、必要に応じて修正する」ことを目的に、大学生登山リーダー研修会（夏山）として開催した。

実技研修の内容は、劔沢をベースに、「登はん研修コース」、「登はん基礎研修コース」は登はん技術やナビゲーション技術を中心に実施した。「縦走研



懸垂下降（カニのヨコバイ）

修コース」は、ナビゲーション技術やロープワークの基礎等を中心に研修を実施した。3コース共通の研修内容としては、リーダーの条件と責務、危急時

対策、生活技術等であった。

講義は、飯田肇が「夏山の気象と雪渓」、小林亘が「ナビゲーション技術」、笹倉孝昭が「確保理論」を担当した。「登山の医学」は野田透、水腰英四郎が担当した。

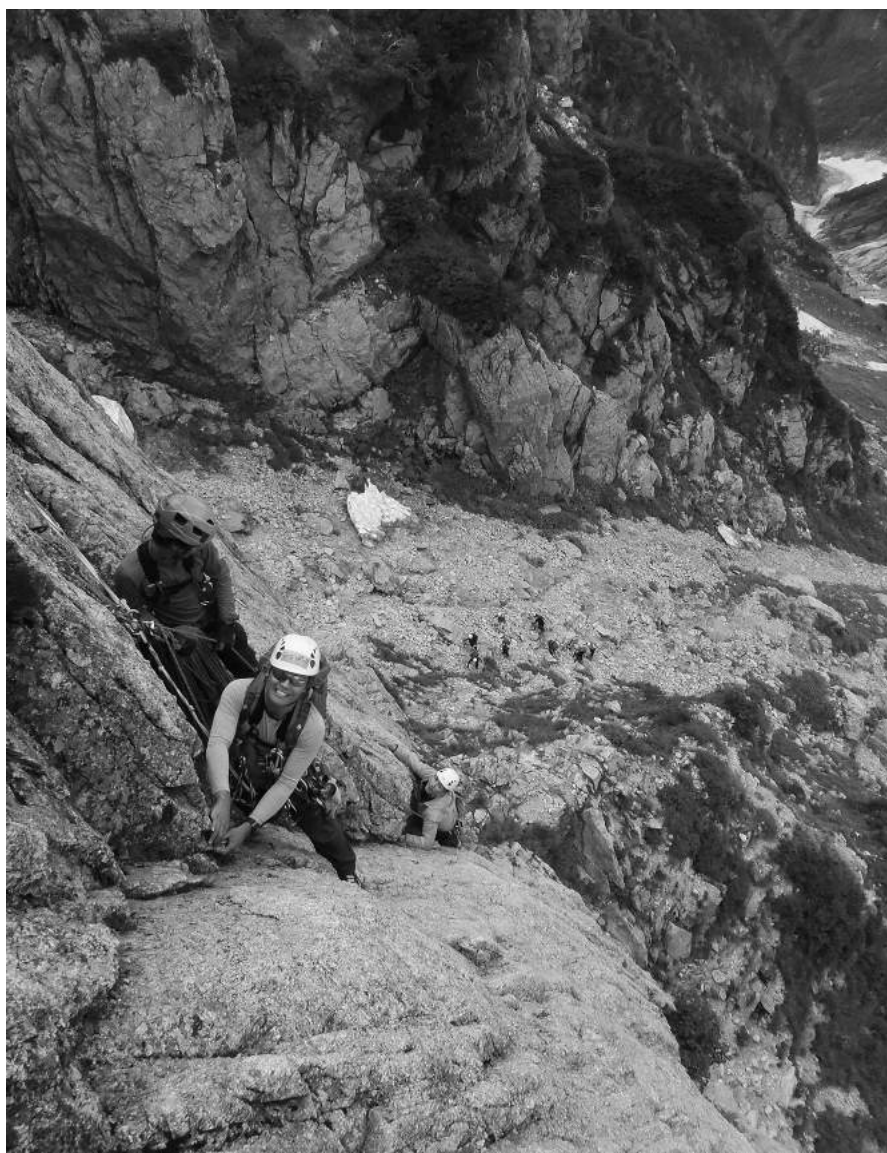
【エピソード】

平成21年度には、気象予報士からの局地天気予報を活用して柔軟に計画を変更したことで、安全で充実した研修を実施することができた。

平成28年度は、入山予定日に大型台風の直撃を受ける恐れが高かったため、劔沢への入山を中止し、研修所敷地内に幕営しての実技研修を実施した。

【参加人数・主任講師】

この期間の平均参加者数は31名だった。最多は平成25年度の43名、最少は平成21年度の17名だった。主任講師は全て鈴木清彦が担当した。



登はん訓練（ハツ峰Ⅵ峰）

立山駅周辺美化協議会と駅周辺のボランティア清掃

Topics

平成3年5月30日、国際的な山岳レクリエーションエリアとして知られる立山黒部アルペンルートの玄関口になっている立山駅周辺の美化活動を行うとともに、観光客の環境美化啓発を図り、立山観光の進展に資することを目的に、「立山駅周辺美化協議会」が設立された。

この協議会は、千寿ヶ原自治会、富山地方鉄道株式会社、立山黒部貫光株式会社、立山貫光ターミナル株式会社、立山山荘協同組合、富山県、立



清掃活動に参加した研修生



清掃活動

山町などで構成されており、設立発起人に当時の所長浦井孝夫が名前を連ねている。

登山研修所では、この協議会の活動に協力するため、大学生の研修会（春山、夏山）時に、研修生、講師、職員約50名が、駅前ロータリーや周辺道路、駐車場のボランティア清掃を実施している。

(3) 大学生登山リーダー雪上研修会

【研修時期・期間・場所】

3月上旬・5日間・登山研修所及び大品山、瀬戸蔵山周辺

【研修内容】

この研修会は、平成21、22年度の2回実施した。「雪上基礎研修コース」と「雪上研修コース」の2コースを設定し、「冬山（積雪期）登山に必要な雪崩回避の方法と対処、凍傷や低体温症を中心とした登山の医学、冬山の気象と氷雪学の基礎を学び、冬山登山の基礎となる技術を確認し、必要に応じて修正する」ことを目的に開催した。研修内容は、大品山や瀬戸蔵山を研修会場として、雪上歩行技術、雪上登はん技術、積雪観測、状況判断と行動判断（ナビゲーション技術、気象、雪崩）、雪崩埋没者の捜索方法、荒天時・危急時対策等を実施した。

【エピソード】

この研修会の開催に先立って、平成20年7月に取りまとめられた「登山研修所の大学山岳部リーダー冬山研修会に係る安全検討会」の提言を受け、登山研



固定ロープの通過



雪崩埋没者搜索訓練

修所では「研修内容や実施方法の標準化と安全対策」、「講師の育成と安全管理教育の徹底」、「研修会運営システムの再構築」を柱とした「大学生登山リーダー研修会（冬山）の安全確保対策について」をまとめた。

これらの検討を経て、雪上研修会の実施前には講師研修会2回と直前調査等で研修地の安全を十分確認した。また、研修内容の標準化のために、実技の指導内容について各担当が指導案を作成した。

【参加人数・主任講師】

参加者数は平成21年度は16名、平成22年度は18名だった。主任講師は角谷道弘と加藤智二が担当した。

(4) 大学生登山リーダー冬山研修会

【研修時期・期間・場所】

3月中旬・7日間・大日岳周辺

【研修内容】

この研修会は、「雪上基礎研修コース」と「雪上研修コース」の2コースを設定し、主に冬山前進基地周辺において実技研修を行い、雪山登山の安全確保の知識・技術を中心に、危急時対策を学び、チームを安全に率いる基礎を研修することを目的とした。

講義は、飯田肇が「雪氷学の基礎と雪崩」を、猪熊隆之が「冬山の気象」を担当し、「登山の医学」は平成28年度の水腰英四郎以外は田邊隆一が担当した。また、杉坂勉が「雪崩搜索」や「雪山での行動判断とリスク管理」を講義した。

【エピソード】

研修会の安全対策として、積雪調査や現地調査、ヘリコプターでの研修山域の空撮、研修会前の講師打合せ、天気予報の入手等の各種対策を実施した。また、調査研究の一環として雪氷学専門家の飯田肇と山岳気象専門の気象予報士猪熊隆之が研修生と一



大日岳山頂

緒に入山し、助言指導した。

平成23年度から大日岳周辺を実技会場として研修していたが、平成26年度は、研修会前日から大量の降雪があり、大品山、鋤崎山方面へ入山することとした。入山も1日遅らせて、実技研修を2泊3日に短縮した。雪崩搜索の実習は、講師による雪崩搜索のデモンストレーションを行い、搜索活動の基本的な流れと搜索時の留意点を研修生に具体的にイメージさせてから実習を行った。

【参加人数・主任講師】

この期間の平均参加者は25名だった。最多は平成26年度の29名、最少は平成23年度の20名だった。主任講師は全て小林亘が担当した。



ヘリコプターによる研修山域の調査（大日岳）

講師となって得たもの

Topics

登山というのは、長ければ一カ月以上にわたって限られたメンバーと一緒に隔絶された環境の中で過ごすスポーツだ。危険にさらされた環境下で我が身を守りつつ、チーム全員が同じ目的に向かって全力を尽くす。その中でチームの和が培われる。改めて、本当に貴重な経験だと実感する。我慢すること、自己犠牲の精神、ぶつかり合うことだってあるかもしれない。その中で人間として成長してゆくのだが、この研修会もまた、知らない者同士が数日間の研修の中で同じような体験をすることになる。

7日間の研修中、講師としてできる限りの登山技術を研修生に伝達するよう努めているが、それ以上に大切だと実感するのが、山に対する取り組み方、考え方などを実際の行動を通して伝えることである。私自身、研修生と一緒に山の話をするのが好きだし、ときおり彼らの行動から垣間見える熱い思いを感じ取ることが好きだ。程度の差こそあれ、「山が好き」という思いは私も研修生も



初心に戻らせてくれる研修の場

同じであり、おかげで研修会は厳しい中にも和気あいあいとした雰囲気も同居する。研修初日にはぎこちなかった班内のコミュニケーションが、山中での四日間の研修最終日



にもなれば一 研修中に一息入れる筆者

体感を感じ取ることができるのは、講師冥利に尽きる。私は彼らから物事にひたむきに取り組むことの大切さを、改めて学ばせてもらっている。

そういう熱い思いを持ち続けることこそ、登山のみならずすべての行為において最も大切な要素である。一昔前に比べれば登山をする若者が増えた昨今だが、こうやって自己研鑽を積み、経験を重ねることでは、増加の一途をたどる山岳遭難を減らす術はないのもまた事実である。そういう意味でも、この研修会の存在意義は非常に大きい。二十歳前後の多感な時期にこのような経験を積むことは彼らにとって非常に大きな意味を持つし、同時に私自身にとっても、改めて初心に戻って山に取り組むきっかけを与えてくれるのだ。

(横山勝丘)



積雪深計

平成 12 年の大日岳遭難事故対策の一つとして、平成 13 年に「冬山研修会の安全確保に関する調査委員会」が設置され、その議論の中で、気象積雪の特性等の情報収集についての提案がなされた。

これを受けて平成 14 年から、冬山前進基地（1,300m）に積雪観測用の 620 cm 高のポールを設置し、積雪深と気温の自動計測及び登山研とのデータ通信が開始された。これにより、これまで未知だった研修対象山域の 1,000 ～ 1,500 m 付近の気象積雪状況を準リアルタイムでモニターできるようになり、その後の研修会等で活用されている。

観測では、冬期間の 1 時間毎の積雪深を把握することができ、冬山研修や講師研修での雪崩事故対策においても重要な役割を果たしている。また、これまでの観測データの解析から、冬期間の最大積雪深は 6 m 近くに達すること、多降雪時には 1 日間で 70 cm 以上の積雪増加があること、1

日間の降雪量は平均で登山研（500 m）の約 2 倍に達すること、厳冬期でも時々降雨があること等が新しい事実としてわかってきた。これらの結果は、科学的に貴重な情報であるのみならず、当地域での研修を安全に実施するために必要不可欠な基礎情報であり、今後の研修会でも大いに活用されることが期待される。

山岳での継続観測では思わぬ困難に直面することがある。ハイテク機器は山岳では意外に脆い。アンテナが屋根雪に埋まり通信不能になり 5 m の雪穴掘りを強いられたり、動物にかじられて観測不能になった地中の配線を 1 日かけて掘り出した。修理にはローテクが力を発揮する。職員や講師の涙ぐましい努力で、今も着々と観測データが蓄積されていることを特筆しておきたい。

（飯田肇）



前進基地と積雪深計

2 安全な登山を普及する指導者を対象とした研修会

この研修会は、多様化する登山志向や登山形態、ニーズに対応した安全登山を実践、普及できる指導者を養成することを目的としたものである。

安全登山普及指導者中央研修会

【研修時期、期間、場所】

第 1 回：6 月下旬または 7 月上旬、3 日間、登山研修所及び大辻山、雑穀谷等

第 2 回：11 月上旬、3 日間、登山研修所及び大辻山、雑穀谷等

【研修内容】

この研修会は、多様化する登山志向や登山形態、ニーズに対応した安全登山を実践、普及できる指導者を養成することを目的に、平成 20 年度に実施した「登はん技術研修会」を再編したものである。「登はん技術研修コース」と「読図・プランニング研修



読図研修（長尾山）

コース」の2コースを設け、年間2回開催した。

研修内容としては、「登はん技術研修コース」では、確保理論や岩登り基礎技術、確保技術を研修し、「読図・プランニング研修コース」では、登山計画と準備、歩行技術、ナビゲーション技術の研修を実施した。平成25年度第2回、平成26年度第1回、第2回で設けた「GPS研修コース」では、カシミールとGPSの連携操作、GPSの有効性と限界、紙地図との併用を中心に研修した。

講義については、「登はん技術研修コース」の「確保理論」は、平成21年度の第1回を除き全て笹倉孝昭が担当し、「読図・プランニング研修コース」の「読図とナビゲーション」は、平成28年度第2回を除き小林亘が担当した。平成26年度第1回のGPSコースでは村越真が「GPSの概要」について講義した。

【エピソード】

平成21年度から新設された「読図・プランニング研修コース」では、研修内容や指導方法について講師陣が試行錯誤を重ねてきた。国体山岳競技やオ



登はん訓練

リエンターリングに関わりの深い方々に講師を依頼し、様々なアドバイスを受けながら登山研修所の「読図・プランニング研修」は発展してきた。

平成23年度第2回には、大韓民国国立公園管理公団山岳安全教育センターとの事業協力の一環として大韓民国国立公園管理公団登山学校長以下4名が研修に参加した。日本と韓国の登山技術の違い等について意見交換がなされ、お互いに有意義な研修となった。韓国の研修生から、国立登山研修所の講師が研修生の意向を引き出し、活発な発言をさせる指導法に感銘を受けた、という感想が寄せられた。

【参加人数・主任講師】

平成24年度は、募集定員25名に対し参加申込者49名。全員が参加要件を満たしていたので、講師の増員を図り、全員の参加を承認した。

この期間の平均参加者数は35名だった。最多は平成24年度第1回の46名、最少は平成21年度第1回の24名だった。主任講師は北村憲彦が9回、瀬木紀彦5回、渡邊雄二と小林亘が各1回担当した。

3 山岳遭難救助の指導者を対象とした研修会

この研修会は山岳遭難救助の指導者を対象に、遭難救助に関する知識と実技についての研修を行い、指導者としての資質向上を図ることを目的としたものである。

山岳遭難救助研修会

【研修時期・期間・場所】

10月下旬・5日間・登山研修所及び大辻山・大品山、雑穀谷

【研修内容】

この研修会では、登山研修所内の各施設や大辻山、大品山周辺、雑穀谷、称名滝等でのクライミング技

術、救助及び搬送技術（支点の構築と構成、確保技術、スタティックロープを利用した救助法、各種搬送技術、吊り下げと吊り上げ、張り込み）、事故発生時の対処・処置等を研修した。

この研修会には、富山県警察本部山岳警備隊、長野県警察本部山岳警備隊、岐阜県警察本部山岳警備



ストレッチャーを使用した搬送訓練

隊から、山岳遭難救助活動の第一線で活躍している隊員を実技講師に派遣していただいている。

平成 21 年度から、応募資格を「登山の基本的な技術を修得している者のうち、各都道府県において山岳遭難救助組織の指導的立場にある者。（警察・消防・自衛隊等職務で山岳遭難救助に携わる者、民間救助組織において携わる者）」とし、募集定員を 40 名とした。

【エピソード】

平成 26 年度からは、「ガーディアン制度」と名付けた訓練中の安全管理システムを導入した。これは、研修生が想定救助訓練等を行う際、研修生の中から 1 名程度を訓練全体の監視役として配置し、研修生に安全管理をさせるシステムである。この研修を通じて、研修生の安全管理に対する意識が非常に高ま

ることになった。平成 27 年度、平成 28 年度も取り入れられ、研修会ではこの制度が定着しつつある。

この期間、「確保理論」の講義は笹倉孝昭が全て担当した。

【参加人数・主任講師】

毎年 100 名（最高は平成 28 年度の 143 名）を超える参加申込があり、研修所施設の収容能力限界の 50 名程度まで参加承認を出している。平成 21 年度から平成 28 年度までの平均参加者数は 50 名であった。内訳は、消防・防災 38 名(74%)、警察 8 名(15%)、自衛隊 4 名（9%）、民間 1 名（2%）となっている。最多は平成 25 年度の 54 名、最少は平成 21 年度の 45 名だった。

主任講師は加藤智二が 2 回、島田靖と長岡健一が各 3 回担当した。



ロープ確保による背負い搬送訓練

4 登山研修所の講師を対象とした研修会

この研修会は、登山研修所の研修講師を対象に、研修会の一層の充実を図るために各種登山技術についての研修を行うものである。

講師研修会

【研修内容】

この期間の講師研修会は、「積雪期」、「冬山」、「救助技術」、「読図・GPS」等をテーマに年間 2 回から 4 回開催した。救助技術に関する研修会は、平成 23 年度、平成 24 年度は年間 1 回、平成 25 年度からは 2 回開催され、講義や事例発表、救助作業等実習、救助技術についての研究協議等を行った。平成 24 年度、平成 25 年度には、読図・GPS に関する講師研修会を開催した。

【エピソード】

平成 21 年度の講師研修会（冬山①②）は、大学生登山リーダー研修会（雪上）の実技担当講師予定者が参加し、雪上研修会を安全に実施するための各種対策に取り組んだ。研修予定場所である大辻山、大品山、大日岳山域等の事前調査を行い、安全管理マニュアル等の様々な判断基準、指導基準の確認を行った。また、「大学生登山リーダー冬山研修会の安全確保対策について」、「大学生登山リーダー研修会指導要項」、「大学生登山リーダー雪上研修会の研修内容



読図・GPS研修

や指導指針」についても再確認した。

平成22年度は講師研修会（積雪期①、②）で、瀬戸蔵山、鉾崎山や大日岳山域の研修会予定ルートを事前調査した。平成23年度は、大日岳周辺でナビゲーション技術やルートファインディング、

雪崩に対する警戒と回避、埋没者の搜索と救出、少人数による搬送技術等の研修と安全確認チェックシートの試行及び積雪状況などの現地調査を実施した。

平成24年度以降の講師研修会（冬山）は大学生



鉾崎山方面の事前調査

登山リーダー・冬山研修会の実技担当講師予定者が参加し、大品山や大日岳周辺を実技会場に、2月下旬から3月上旬に4日間の日程で開催した。埋没者の搜索と救助や搬送訓練、積雪層観察等の研修を実施し、冬山研修会の安全確保や研修会で使うルート等について研究協議を実施した。

5 中高年登山者の指導者を対象とした講習会

この研修会は、毎年全国2カ所において、国立登山研修所と日本山岳・スポーツクライミング協会（平成28年度までは日本山岳協会）と開催都道府県教育委員会、開催都道府県山岳連盟（協会）が共催し、中高年登山者の指導者を対象に、各種講習を実施して安全な登山の普及を図ったものである。

中高年安全登山指導者講習会

【講習時期・期間・場所】

9月～10月・3日間・東部地区、中部地区、西部地区の3地区

※平成22年度以降は東部地区、西部地区の2地区

【講習内容】

平成21年度は、東部地区、中部地区、西部地区の3ブロックで開催したが、平成22年度からは、東部地区、西部地区の2ブロックでの開催とした。



ナビゲーション技術講習（平成28年度東部地区：新潟県）

平成21年度までの各講習会は、開催地の都道府県教育委員会が中心となって企画・運営されてきたが、平成22年度からは都道府県山岳連盟（協会）が中心となり、各地の山域で特色あるコースを登山しながらの講習会が実施された。

平成25年度からは、「ナビゲーション技術」、「ファーストエイド」、「山岳気象」を主な講習内容として、これらのテーマを各年度に一つずつ順番に



「道迷いを防ぐには」をテーマにした研究協議（平成28年度西部地区：徳島県）

取り上げて講習することとした。ナビゲーション技術については村越真、ファーストエイドについては大城和恵、山岳気象については猪熊隆之が担当した。また、中高年登山者の現状と課題に関する講義については、北村憲彦が担当した。

登山研修所の専門調査委員による講義や開催地の山岳連盟（協会）の実技講師による班別の実技、研

究協議も実施した。参加者は、都道府県山岳連盟（協会）や中高年の登山グループで指導的立場にある者がほとんどであった。

【参加人数】

この期間の平均参加者数は 43 名だった。最多は平成 22 年度西部地区と平成 24 年度東部地区の 64 名、最少は平成 21 年度西部地区の 22 名だった。

関係機関・団体との連携

富山県立山カルデラ砂防博物館との連携・協力

平成 21 年度に、国立登山研修所と富山県立山カルデラ砂防博物館の間で、「山岳地帯の気象・冬山の積雪調査研究等に係る連携・協力の推進に関する基本協定書」が締結された。

平成 12 年 3 月の大日岳遭難事故を受けて設置された委員会等で、登山研の研修会等の安全対策に資する山岳気象・積雪に関する調査研究を進めることの重要性が指摘された。富山県立山カルデラ砂防博物館では、これまでも立山山岳地域での気象積雪調査を継続して実施してきたが、これらの調査研究成果を安全登山に活用するためには、登山研との連携が必要不可欠である。今では、立山の高所で観測されたデータ等が登山研を通して安全登山に活用されている。また、登山研で新たに冬山前進基地において開始した気象積雪観測の



積雪観測調査



雪氷学の講義

データ解析を両者で連携して行い、安全登山に活用することも連携協定の重要なテーマとなっている。これらの調査研究は、研修会での安全に貢献するのみならず、広く我が国の冬山登山の安全にも貢献することができるものと考えている。

さらに、講師研修会等で大日岳の各標高域で実施されている積雪観測や、立山山麓スキー場で冬期間連続して実施されている積雪観測の結果は、立山山岳地域の積雪特性把握にとって貴重なデータであるばかりでなく、これらの調査研究により、協定の目的の一つである人材養成でも大きな成果があがっている。登山研の講師や関係者から「積雪観測は任せてくれ！」という声が聞かれるようになり、頼もしい限りである。

（飯田肇）

国立立山青少年自然の家との事業協力

登山研修所と国立立山青少年自然の家は、昭和 60 年度から始まった集団登山指導者研修会の開催をはじめ、様々な事業協力をしてきた。平成

21 年 4 月に登山研修所が日本スポーツ振興センターに移管したことを期に、より一層、緊密にかつ組織的な連携・協力体制の充実に努め、自然の



クライミング体験

中での活動を通じた事業の充実及び地域社会の発展に寄与することを目的に同年9月に事業協力に関する覚書を締結した。

事業協力の例として、青少年自然の家で毎年5月に行われている大辻山登山道の下見を兼ねた職員研修会に専門職を派遣し、児童生徒が安全な登山ができるように、登山の基礎知識や留意事項等について職員を指導している。また、毎年8月に



立山登山

8泊9日の日程で開催される海拔0mから3,000mまでを自力で踏破する事業「チャレンジ&チェンジ! 真夏のアドベンチャー」の後半部分、登山研修所から材木坂～美女平～弥陀ヶ原～室堂～雄山頂上の登山行程にも専門職を派遣し、「登山の歩行技術や安全管理、危急時対策」等の専門的な指導を行い、安全で質の高い事業となるように協力している。

大韓民国国立公園管理公団山岳安全教育センターとの事業協力

平成22年10月27日、国立登山研修所において「大韓民国国立公園管理公団山岳安全教育センターとの事業協力に関する協約書」の締結式が行われた。

韓国では近年、レジャーとしての登山が国民の間に盛んになり登山人口が増加し、それにとまって山岳遭難事故も増加傾向にある。そのため、平成22年2月にソウル市の国立公園管理公団内に山岳安全教育センターを開所し、安全登山のための教育活動を始めたとのことである。そこで、共に安全登山の普及活動をする立場で本登山研修所と山岳安全教育センターが友好関係を構築し、相互に協力し登山事故防止と安全登山の普及のた

めの研修事業や情報提供等を行い、健全な登山の発展に寄与することを目的に本協約書を締結するに至った。

本登山研修所は登山指導者の研修機関として、安全登山のための豊富な研修経験や知識と技術が蓄積されており、それらを通して友好を深めることができるとともに、日本を訪れる韓国からの登山者への安全情報の提供にも繋がる良い機会になることが期待された。

翌年から、協約書に基づき相互に相手国を訪問し、情報提供を密にしながら両国の登山技術や安全登山のための研修を行っている。（渡邊雄二）

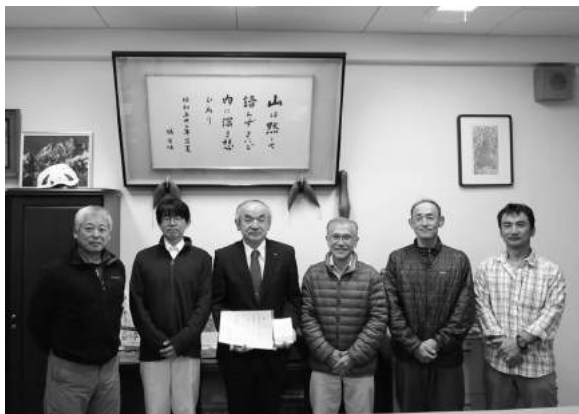


平成25年度の訪韓



平成28年度の来所

国立登山研修所友の会との事業協力



確保技術ハンドブックの贈呈（平成27年11月）

国立登山研修所友の会（旧文部省登山研修所友の会）は平成2年10月に設立後、会員相互の交流を深めながら、登山研修所には各種の支援を行ってきた。その支援内容は、研修事業の広報、研修会講師の交流、確保技術の調査研究、「登山研修」の頒布、カレンダーの作成配布など多岐にわたっていた。

そこで、登山研修所と友の会がこれまで培ってきた信頼関係と事業実績をもとに、より一層、緊



会員交流会の様子

密かつ組織的な連携・協力体制の充実を図り、登山研修所の発展及び我が国の健全な登山の発展に寄与することを目的に、「国立登山研修所友の会との事業協力に関する協定書」（平成22年12月12日）を締結した。

このことにより、曖昧であったところなどが整理され、相互の協力関係がより明確・緊密となり、さらにより良い方向に向かうことになった。

（渡邊雄二）

富山県警察本部生活安全部地域課との事業協力

富山県警察山岳警備隊と登山研修所とは開所以来、山岳警備隊員の訓練、登山研修所主催研修会への講師派遣、山岳遭難救助技術の相互交流、全国山岳遭難救助指導者研修会（警察庁主催）の開催、登山事故防止のための情報提供等、緊密な信頼関係を保ちながらそれぞれの立場で登山事故防止と安全登山の普及に努め、健全な登山の発展に寄与してきた。

このような実績を踏まえ、国立登山研修所と県



訓練開始式



人工岩場での視閲訓練

山岳警備隊を所管する富山県警察本部生活安全部地域課は事業協力に関する協定書を締結（平成25年4月1日）することにより、さらなる協力関係を構築し、登山事故防止と安全登山の普及のための研修事業や情報提供等を相互に行い、健全な登山の発展に寄与することとした。

協力事項は次の4項目とした。

- (1) 登山事故防止のための情報提供に関すること。

- (2) 安全登山の普及及び山岳遭難救助技術の向上に関すること。
- (3) 登山指導者養成のための研修に関すること。

- (4) その他双方により必要と認めた事項に関すること。

(渡邊雄二)

公益社団法人日本山岳ガイド協会との事業協力



「安全登山ハンドブック」

国立登山研修所の事業は登山指導者の養成及び登山に関する情報提供が主たるものであるが、安全登山の普及・発展には一般登山者向けの安全な登山のための情報提供が不可欠である。そこで、登山スタイルの多様化による事故を防止するため、登山者が自ら知識を向上させて登山することができるよう、公開講座の開催や冊子の配布等を通じて安全登山のための情報を広く提供することとした。

一般登山者に向けた情報提供の実施に当たっては、公益社団法人日本山岳ガイド協会が主催し国立登山研修所が後援してきた「百万人の山と自然『安全のための知識と技術 公開講座』」をより一層連携・協力して実施し、我が国の安全登山の普及・発展に寄与することを目的に、国立登山研修所と公益社団法人日本山岳ガイド協会は事業協力

国立登山研修所の事業は登山指導者の養成及び登山に関する情報提供が主たるものであるが、安全登山の普及・発展には一般登山者向けの安全な登山のための情報提供が不可欠である。そこで、登山スタイルの多様化による事故を防止するため、登山者が自ら知識を向上させて登山することができるよう、公開講座の開催や冊子の配布等を通じて安全登山のための情報を広く提供することとした。

に関する協定書を締結(平成25年4月12日)した。連携・協力事項については下記の3項目である。

- (1) 開催する公開講座への講師の派遣に関すること。
- (2) 公開講座等で配布する小冊子の作成及び配布に関すること。
- (3) その他双方が必要と認めた事項に関すること。

なお、初年度(25年度)は「公開講座」を全国主要都市11会場で開催し受講者は7,280名、小冊子「安全登山ハンドブック」は20万部作成し一般登山者向けに配布した。

(渡邊雄二)



公開講座(平成26年度東京会場)

